

学会ニュース No.145

2023 年 10 月 31 日 全日本博物館学会事務局
〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28
國學院大學博物館学研究室
Tel : 03-5466-0268 E-mail : jimmu@museology.jp

*** 目次 ***

2023 年度総会・第 49 回研究大会報告・・・1
50 周年記念国際シンポジウム開催報告・・・8
学会後援事業 第 10 回水族館シンポ
ジウム「水族館とは？日本の水族館を
考える」のご案内・・・・・・・・・10

《展覧会への誘い》
新潟県立歴史博物館秋季テーマ展示
守れ！文化財 「障害」をめぐるモノ
とヒトに光を灯す・・・・・・・・・14
選挙管理委員の募集について・・・・・・・・・16

2023 年度総会・第 49 回研究大会報告

日 時：2023 年 7 月 1 日（土）・2 日（日）

会 場：國學院大學

総会参加者：44 名（委任状 153 名）

研究大会参加者：1 日 93 名、2 日 93 名

賛助会員 3 名、会員外：17 名

7 月 1 日（土）

《2023 年度総会》 12：30～13：30

山本哲也委員の司会進行で進められた。

- 1 開会の辞 内川隆志副会長
- 2 会長挨拶 内川隆志副会長による代理挨拶
- 3 資格審査・総会成立報告 山本哲也委員
出席者 44 名、委任状 153 名を合わせて、規約の成立要件を満たしており、総会が成立している旨の報告があった。
- 4 議長選出
矢島國雄会員が推薦、議長に選出された。
- 5 2022 年度事業報告 二葉俊弥幹事
- 6 2022 年度会計報告 二葉俊弥幹事
- 7 2022 年度監査報告 粕谷崇監事
総会資料に基づき報告、承認された。
- 8 2023 年度事業計画案 高田浩二委員
総会・大会の開催、学会誌・ニュース発行、研究会の開催、学会賞・奨励賞の選考・授与 等について総会資料に基づき提案、承認された。
- 9 2023 年度予算案 高田浩二委員
事業計画に基づく予算案が提案、承認された。
- 10 学会賞・奨励賞選考報告 山本哲也委員
学会賞および奨励賞の選考について、『博物館学雑誌』第 47 巻 2 号、第 48 巻 1 号の掲載論文および会員による著書を対象に選考を行った結果、学会賞は該当なし、奨励賞は伊

東俊祐氏の「ミュージアムと障害者の社会史—1974 年のモナ・リザ展に着目して—」が受賞し表彰された

11 閉会の辞 内川隆志副会長

《第 49 回研究大会》

○研究発表・討論（発表 15 分・質疑応答 5 分）

- (1) 堀江典子（佛教大学）
消防施設における博物館的機能の現状と課題：アンケート調査の結果から
- (2) 川崎真緒（明治大学大学院）
日本博物館学における「博物館」概念の理解と構築の分析
- (3) 戸田孝（滋賀県立琵琶湖博物館）
「科学館」と「自然史館」の共存事例から見えること
- (4) 福嶋純之（富山大学大学院）
城郭関連博物館の分類とその特徴について
- (5) 町田小織（東洋英和女学院大学）
クニを展示する意味：1900 年パリ万博におけるボスニア・ヘルツェゴヴィナ館
- (6) 森沙耶（北海道大学大学院）
博物館教育研究における Family Learning についての整理と考察
- (7) 井上瞳（愛知学院大学）
20 世紀初頭のアメリカの美術館における日本美術の位置：ベンジャミン・ギルマン『美術館の目的と方法に関する理念』から
- (8) 邱君妮（文化遺産国際協力センター）
オランダ「共有の文化遺産」概念における協働的な博物館活動に関する研究：アムステルダム国立美術館を事例として
- (9) 佐藤崇範（琉球大学）
自然史標本を収蔵する博物館・研究機関等における「研究資料」の現状と課題：アンケ

ート調査結果をもとに

7月2日（日）午前

- (10) 佐藤彩（茅ヶ崎市博物館）
市井学芸員の企画が全国展開されるまで
- (11) 佐竹渉（千葉工業大学 岐阜かかみがはら
航空宇宙博物館）
限られたスペースで大型な展示物を主題と
した企画展の試み：常設展示空間の企画展化
- (12) 小舘誓治⁽¹⁾、八木 剛⁽²⁾、大平和弘⁽¹⁾、
辰村 絢⁽²⁾、河田麻美⁽²⁾、半田久美子⁽²⁾
(1) 兵庫県立人と自然の博物館／兵庫県
立大学、(2) 兵庫県立人と自然の博物館
自然系博物館における未就学児への環境学
習の支援：「ひょうごエコロコプロジェク
ト」におけるプログラム実施後の園児の様子
- (13) 島絵里子（北海道大学大学院）
視覚に障害のある児童生徒を対象にした博
物館プログラムにおいて肝要なこととは：文
献調査からの考察
- (14) 中村久美子（滋賀県立琵琶湖博物館）、水
谷早彩香（神戸大学大学院）、上枝千明（神
戸大学）、大野朋子（神戸大学大学院）、池田
勝（あさがら子どもと自然舎）
未就学児を対象とした博物館での自然体験
活動における参加者の変化
- (15) 瀧端真理子（追手門学院大学）
求人情報から見る米国ミュージアムの寄附
金獲得戦略
- (16) 木村文（目白大学）
リトアニアの科学技術系博物館における
COVID-19 流行前後のソーシャルメディア投
稿内容の分析

7月2日（日）午後

- (17) 本間浩一（慶應義塾大学）
中央区まちかど展示館の Web サイトのアク
セス解析
- (18) 笹木一義、奥山英登、シンウォンジ（国立
アイヌ民族博物館）
博物館来館者の、来館前後の意識変容・行
動変容分析の試行：国立アイヌ民族博物館の
来館者アンケートの回答分析試行より
- (19) 飯田（松本） 日向子（東京国立博物館）
来館時の行動や感情に基づくミュージア
ム・リテラシーの類型の分析
- (20) 坂倉真衣（宮崎国際大学）
「出会いを起点とした文脈モデル」による
展示物：来館者間相互作用過程の可視化

- (21) 繁宮悠介（富山国際大学）
会話分析による水族館での学習内容の推定
- (22) 久保健
ドイツ関連の文化遺産見学会から見る館外
活動への課題
- (23) 竹下春奈（明治大学大学院）
遺跡の活用事業における博物館利用に関す
る一考察：関東地方の貝塚遺跡を対象として
- (24) 持田 誠（浦幌町立博物館）
「博物館が無い自治体の人々」にも「博物館
のための負担」をしてもらうには何が必要か？
- (26) 金山喜昭（法政大学）
博物館法改正と学芸員養成の在り方につい
て：全国大学博物館学講座協議会によるアン
ケート結 果の分析より
- (27) 井上由佳（明治大学）、梨本加菜（鎌倉女
子大学）、横山寿美代（杉並区立杵掛小学
校）、菅 祐子（新潟市立上所小学校）
博物館・学芸員の社会的役割の理解を促す
授業・教材開発のための小学校教科書調査結
果の中間報告
- (28) 田中裕二（静岡文化芸術大学）
大学と地域に根ざした美術館・博物館にお
ける実践教育と連携について

・ポスター発表

- (1) 寺農織苑（北海道大学大学院）
ファミコンの何を展示すればよいか：ミュ
ージアムにできるゲームアーカイブ
- (2) 宇仁義和（東京農業大学）、オン・ゼウオン
（元大韓民国歴史博物館）
韓国の学芸員制度と博物館：日本との比較
から
- (3) 並木美砂子、蓮井雅之（帝京科学大学）
市民との共同によるホッキョクグマ行動観
察のとりくみ—大阪市天王寺動物園の親子ホ
ッキョクグマの観察事例より—
- (4) 井上由佳（明治大学）、横山寿美代（杉並区
立杵掛小学校）、菅 祐子（新潟市立上所小
学校）
学校図書館を活用した博物館理解を促す授
業実践：杉並区と新潟市の事例から
- (5) 嶽本あゆみ（沖縄工業高等専門学校）
ハンズオンを目的とした衝撃成形レプリカ
標本における転写性と原型への影響
- (6) 鈴木悠希子（国際基督教大学）、大澤夏美
（北海道大学文学院）、山田良輔（札幌市博
物館活動センター）、持田誠（浦幌町立博物

館)、卓彦伶(北海道大学文学研究院)

博物館のPR手法としての「博物館擬人化」

(7) 馬場幸栄(国立科学博物館)

ヒ素を含む国内大学図書館収蔵洋書の発見と分析

(8) 阿部麟太郎(北海道大学文学部)

エコミュージアムと「風土」論

(9) 松山沙樹(京都国立近代美術館)

美術館における絵画鑑賞の内容・方法・鑑賞教材等のアンケート集計

【附・2023 年度総会資料】

2022 年度事業報告

1. 2022 年度総会の開催

日時：2022 年 6 月 25 日(土)

参加者：58 名(委任状 182 通)

内容：2021 年度事業報告／2021 年度会計報告／
2021 年度監査報告／2022 年度事業計画案
／2022 年度予算案

2. 第 48 回研究大会の開催

日時：2022 年 6 月 25 日(土)～6 月 26 日(日)

場所：國學院大學渋谷キャンパスにて開催

参加者：現地:60 名程、ZOOM:40 名程度

(ハイブリット開催、1 日当たりの人数)

内容：

▼研究発表・討論(質疑応答はコメント機能を利用)

(1) 久保 健(公益財団法人日独協会会員)

ドイツにおける産業用軽便鉄道の展示について

(2) 二葉 俊弥(國學院大學)

日本初の海軍博物館「海軍参考館」について

(3) 芦谷 美奈子、戸田 孝、大塚 泰介

(滋賀県立琵琶湖博物館)

「琵琶湖環流」はパネルだけでどう伝わったかー実演なしの物理展示の伝達効果とその評価ー

(4) 大藪 隼平(北海道大学理学院)

「三笠市立博物館において開催された巡回展『ポケモン化石博物館』における、アンケート調査の結果と考察」

(5) 大関 絢子(神戸大学大学院)

「マイグレーション・ミュージアム」における展示の変遷について

(6) 瀧端 真理子(追手門学院大学)

英国のミュージアムにおける寄附金獲得

戦略-アシュモレアン博物館、ナショナル・ギャラリー、ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーを事例としてー

(7) 堀江 典子(佛教大学)

都市施設の博物館的機能充実に向けてーパブリックアートと企業メセナの観点からー

(8) 大澤 康太郎(日本科学未来館)

日本科学未来館のサステナビリティ対応の報告と職員の応答ー飲料自動販売機におけるペットボトルの販売中止策に関してー

(9) 福田 和浩

(八尾市立しおんじやま古墳学習館)

学芸員インタビュー調査から見た博物館連携の現状ー地域における有効な博物館ネットワークの姿ー

(10) 邱 君妮(東京文化財研究所文化遺産国際協力センター)

文化間の対話を促進する博物館の可能性ー台湾の博物館事業を中心に

(11) 菅井 薫(立教大学)

博物館での福祉的実践の現代的位相：ウェルビーイングとソーシャルワークに関する言説を中心に

(12) 島 絵里子(大阪市立自然史博物館／北海道大学大学院)

視覚に障害のある人への海外の博物館での取り組み事例(2017～2022 年)：オンライン記事からの考察

(13) 中村 耕作、早川 富美子(国立歴史民俗博物館／國學院大學栃木短期大学)

博物館資料をもとにした創作の可能性ー〈縄文土器×音楽〉を通じた「協働的な学び」に向けてー

(14) 戸田 孝(滋賀県立琵琶湖博物館)

スマートフォンを利用した体感型回転実験

(15) 奥山 英登*、笹木 一義*、押野 朱美*、カサド・パルド・ケラール*、今野 彩*、シンウオンジ*、永石 理恵*、長谷 仁美*、両角 佑子*、佐藤 優香**(*国立アイヌ民族博物館、**東京大学大学院情報学環)

体験型展示「探究展示テンパテンパ」における、コロナ禍での運用の工夫とその評価

(16) 笹木 一義*、奥山 英登*、押野 朱美*、佐藤 優香**(*国立アイヌ民族博物館 **東京大学大学院情報学環)

国立アイヌ民族博物館の教育普及ツール開

- 発着物のぬりえワークシートを事例として
- (17) 武井 二葉
社会教育としての博物館教育
- (18) 田中 裕基、藤井 英、安福 紘大、伊豆原 月絵（日本大学理工学部）
コロナ禍における学芸員養成課程の実践教育—オンライン星空観望会の実施から—
- (19) 高原 耕平（人と防災未来センター）
「さわる、そっからかんがえる」：人と防災未来センターにおける災厄をめぐる対話ワークショップ事例の報告
- (20) 町田 小織（東洋英和女学院大学）
持続可能な学修のための試み—単位取得後も続く「博物館教育論」—
- (21) 森 沙耶、奥本 素子（北海道大学）
科学館職員からのインタビューから見たハンズ・オン展示物を通した Family Learning について
- (22) 池辺 靖（日本科学未来館）
来館者アンケートから見るコロナ禍の2年間に人々のリスクに対する意識
- (23) 木村 文
ターニングポイントか、応急処置か？：COVID-19 流行初期のリトアニアにおけるデジタル化の事例
- (24) 本間 浩一（慶應義塾大学）
デジタル化と少子高齢化による博物館の変容の仮説
- (25) 齊藤 有里加、山田 浩之、下田 彰子、遠藤 拓洋、梶並 純一郎、小川 義和（東京農工大学科学博物館）
デジタルアーカイブを野外博物館で活用するには—自然教育園 Web 教育コンテンツの現地活用プログラム開発—
- (26) 山西 良平（西宮市貝類館）
博物館法一部改正による登録制度の改定に伴う新たな審査基準について
- (27) 宇仁 義和・持田 誠・石井 淳平（東京農業大学）
これからの博物館行政と支援体制の構築に向けた試論
- (28) 安曾 潤子（インクルーシブミュージアム）
IOCM 研修から見る、世界での「インクルージョン」の捉え方
- (29) 佐藤 友美（名古屋大学）
日本における産業博物館の成立と不成立
- (30) 須藤 茂樹（四国大学）

- 博物館学芸員養成と大学の地域貢献—美馬市「寺町」での取り組みを中心に—
- (31) 並木 美砂子¹、赤見 理恵²、橋詰 二三夫³、長谷川 大介⁴（1. ShoeZ（保全教育団体）2.（公財）日本モンキーセンター 3. ボランティアサザンクロスジャパン協会 4. サンシャインエンタプライズ）
動物園水族館における保全教育実践における園館・保全教育団体・市民の役割
- (32) 井上 美紀
（下関市立しものせき水族館 海響館）
地域の教育資源を活用した小学校と地域及び水族館との年間を通した連携授業の構築と実践
- (33) 井上 由佳、横山 寿美代、福島 郁子（明治大学、杉並区立杵掛小学校、港区立みなと科学館）
博学連携の拠点としての学校図書館①：杉並区立杵掛小学校での授業実践から
- (34) 梨本 加菜、菅 祐子（鎌倉女子大学、新潟市立上所小学校）
博学連携の拠点としての学校図書館②：新潟市立小学校における授業実践から
- (35) 佐藤 優香（東京大学大学院）
学校資料の学内での保存、展示、活用のための試み—京都府立豊学校における生徒向けワークショップ—
- (36) 小舘 誓治*、八木 剛**、大平 和弘*、高瀬 優子***（*兵庫県立人と自然の博物館／兵庫県立大学 **兵庫県立人と自然の博物館 ***元兵庫県立人と自然の博物館）
自然系博物館における未就学児への環境学習の支援～「ひょうごエコロプロジェクト」におけるプログラム実施後の先生の反応

3. 博物館学雑誌の発行

第48巻第1号の編集と発行

第48巻第2号の編集と発行

4. 学会ニュースの発行

No.141：2022年 7月31日発行

No.142：2022年 10月31日発行

No.143：2023年 2月28日発行

No.144：2023年 5月31日発行

5. 研究会の開催

計3回開催

第1回研究会

中止（茅ヶ崎市博物館見学）

第2回研究会

テーマ：「日本の博物館におけるSDGsの
達成状況と課題」

主催：全日本博物館学会

日時：2022年12月5日（月）
19：30～21：00

会場：ZOOMによるオンライン開催

参加者：30名

第3回研究会

テーマ：「博物館のこれからを考える・現場
の視点と共に」

主催：全日本博物館学会

日時：2022年2月4日（土）
13：30～17：00

会場：日本大学理工学部駿河台キャンパス
（ハイブリット開催）

参加者：64名（オンライン47名、
対面17名）

第4回研究会

テーマ：「茅ヶ崎市博物館見学会」

主催：全日本博物館学会

日時：2023年2月17日（金）
14：00～16：00

会場：茅ヶ崎市博物館

参加者：17名

第5回研究会

テーマ：「栃木県立博物館新収蔵庫見学会」

主催：全日本博物館学会

日時：2023年2月26日（日）
14：00～16：00

会場：栃木県立博物館

参加者：20名

6. 委員会の開催

① 委員会 計5回開催

第1回：2021年8月31日（水）、

ZOOMによる開催

記念事業の確認／記念誌発行などにつ
いて

第2回：2022年12月20日（火）、

ZOOMによる開催

記念事業の確認／記念誌発行などにつ
いて／次回大会について 等

第3回：2023年5月28日（土）、

ZOOMによる開催

記念事業の確認／記念誌発行などにつ
いて／次回大会について 等

第4回：2022年6月14日（水）、

ZOOMによる開催

次年度研究大会詳細について／総会資料
等に関して 等

第5回：2023年7月1日（土）、対面による開
催（予定）

次年度について 等

② 学会賞・奨励賞・特別賞選考委員会

2022年5月25日（水）オンライン開催以下
作品を奨励賞と決定し、2022年度総会にて授与
井上瞳「ボストン美術館設立理念の方針転換
と日本美術の位置付け—1904年『理事報告書』
にみるウィリアム・ビグロウの役割』『博物館
学雑誌』第46巻第2号所収

③ 博物館学雑誌・学会ニュース編集委員会 メール・ZOOM上での協議

7. その他

<事業共催>

・「今、博物館研究の在り方を考える・最新の博物
館学事典の活用から」

主催：日本ミュージアム・マネジメント学会

開催日：2022年10月16日（日）

会場：ビジョンセンター日比谷

・「軍事・戦争遺跡の保存とエコミュージアムの可
能性を考える」

主催：NPO 法人旧真田陸軍墓地とその保存
を考える会

開催日：2022年11月23日（水）

会場：大阪歴史博物館

<事業後援>

・「VTV 日本上陸30周年記念フォーラム2022 対
話型鑑賞のこれまでとこれから」

主催：京都芸術大学アート・コミュニケー
ション研究センター

開催日：2022年8月20日（土）～21日（日）

会場：東京国立博物館平成館大講堂

・「展示学講座」

開催日：2022年12月10日（土）～11日（日）

会場：オンライン開催

2023年度事業計画案

1. 総会の開催

2023年7月1日（土）、國學院大學（対面）

2. 研究大会の開催

2023年7月1日（土）・2日（日）、國學院大學

2022年度会計報告

A.一般会計

【収入の部】

費目	予算額	決算額	差異	摘要
年会費	2,960,000	2,582,000	▲ 378,000	
入会金		54,000		新入会27件(3,000円×18件)+(学生入会金免除9件)
正会員年会費	2,760,000	2,328,000	▲ 378,000	388件(6,000円×388件)
賛助会員年会費	200,000	200,000	0	一口20,000円×10件
雑収入	200,000	375,000	175,000	
雑誌売上 (バックナンバー)		39,000		会員39冊(1000円×39件)
雑誌売上 (定期購読)	200,000	336,000		112冊(3,000円×112件)
その他				
預金利息	5	6	1	
小計	3,160,005	2,957,000	▲ 203,005	
前年度繰越金(前年決算額)	585,967	585,967	0	
合計	3,745,972	3,542,967	▲ 203,005	

(単位:円 ▲=収入不足)

【支出の部】

費目	予算額	決算額	差異	摘要
人件費	670,000	623,000	47,000	
幹事手当	600,000	600,000	0	¥50,000×12ヶ月(事務局幹事)
臨時雇人給与	70,000	23,000	47,000	発送等アルバイト等
事務費	715,000	376,807	338,193	
交通費	200,000	7,040	192,960	幹事交通費
消耗品費	60,000	50,825	9,175	文房具、発送ラベル、封筒、封筒印刷費等
備品費	0	0	0	
通信費	450,000	318,942	131,058	ニュース発送(No.141~144)、諸通知 等
雑費	5,000	0	5,000	振込手数料等
事業費	2,260,000	1,962,392	297,608	
委員会費	100,000	0	100,000	ZOOM開催につき不使用
大会費	100,000	170,694	▲ 70,694	対面大会実施につき超過
研究会費	300,000	107,066	192,934	研究会用備品含む
印刷費	1,700,000	1,630,952	69,048	雑誌(48巻1号、2号)・ニュース(No.141~144) 等
HP運営・リニューアル費	60,000	53,680	6,320	HP維持管理経費、事務局メール運営費
表彰費	30,000	14,147	15,853	
慶弔費	20,000	0	20,000	
予備費	50,972	0	50,972	
合計	3,745,972	2,976,346	759,626	

(単位:円 ▲=支出超過)

【次年度繰越】

一般会計	(収入)	(支出)	(残高)
	3,542,967	2,976,346	= 566,621

監査の結果、適正に処理されていると認めます。

令和 5年 6月 1日

保管状況(令和5年4月30日現在)

銀行口座(三菱UFJ銀行)	472,313
郵便振替口座	0
郵便貯金口座	91,733
現金	2,575
合計	566,621

西村 功志 印
粕谷 崇 印

3. 学会誌の発行

第 49 巻第 1 号・第 49 巻第 2 号の編集と発行

4. 学会ニュースの発行

年 4 回程度発行

5. 研究会の開催

年 6 回程度開催

6. 学会賞・奨励賞・特別賞の選考・授与

2023 年度 選考委員会 6 月 25 日（日）オンライン開催

授与 2023 年度総会

2024 年度 選考委員会 2024 年 4～5 月開催

授与 2024 年度総会

7. 委員会の開催

委員会の開催（年 4 回程度を予定、10 月・4 月・総会時以外はメールによる持ち回りで開催）

8. その他

その他議事

1、学会賞・奨励賞・特別賞選考の結果

2023 年度 奨励賞

伊東俊祐「ミュージアムと障害者の社会史—
1974 年のモナ・リザ展に着目して—」
『博物館学雑誌』第 47 巻第 2 号（2022
年 4 月 30 日発行）所収

2023年度予算案

A.一般会計

【収入の部】

費目	2023年度予算額	2022年度予算額	差異	摘要
年会費	3,020,000	2,960,000	60,000	
入会金	2,820,000	2,760,000	60,000	新入会 20 件 (3,000 円 × 20 件) 前年度実績より
正会員年会費				460 件 (6,000 円 × 460 件) 前年度実績より
賛助会員年会費	200,000	200,000	0	一口 20,000 円 × 10 件 前年度実績より
雑収入	200,000	200,000	0	
雑誌売上 (バックナンバー)				
雑誌売上 (定期購読)	200,000	200,000	0	バックナンバー販売、定期購読 他
その他				
預金利息	5	5	0	前年度実績より
小計	3,220,005	3,160,005	60,000	
前年度繰越金(前年決算額)	566,621	585,967	▲ 19,346	
合計	3,786,626	3,745,972	40,654	

(単位:円 ▲=収入減)

【支出の部】

費目	2023年度予算額	2022年度予算額	差異	摘要
人件費	540,000	670,000	▲ 130,000	
幹事手当	480,000	600,000	▲ 120,000	¥40,000 × 12ヶ月
臨時雇人給	60,000	70,000	▲ 10,000	アルバイト 前年度余剰につき減額
事務費	715,000	715,000	0	
交通費	200,000	200,000	0	委員会・監事・幹事 交通費
消耗品費	60,000	60,000	0	文房具、発送ラベル、封筒等
備品費	0	0	0	
通信費	450,000	450,000	0	雑誌・ニュース、諸通知、総会書類郵送費 等
雑費	5,000	5,000	0	
事業費	2,360,000	2,260,000	100,000	
委員会費	100,000	100,000	0	
大会費	200,000	100,000	100,000	
50周年事業費	100,000	0	▲ 100,000	記念事業実施、記念誌発行費 等
研究会費	200,000	300,000	▲ 100,000	開催費用、講師謝礼・交通費、研究会広報用紙 等
印刷費	1,700,000	1,700,000	0	雑誌・ニュース等
HP運営費・リニューアル費	60,000	60,000	0	HP維持管理費、事務局メールサーバー代 等
表彰費	50,000	30,000	20,000	
慶弔費	20,000	20,000	0	
予備費	101,626	50,972	50,654	
合計	3,786,626	3,745,972	40,654	

(単位:円 ▲=支出削減)

全日本博物館学会設立 50 周年記念 国際シンポジウム開催報告

全日本博物館学会は 1973 年に設立され、ちょうど今年 2023 年は 50 周年を迎えた。博物館関係者はもとより、利用者、研究者、多くの人々との議論を通じて、日本の博物館の未来を描くよい機会とするため、2023 年 9 月 17 日（日）、国立科学博物館・日本博物館協会・ICOM 日本委員会との共催で国際シンポジウムが開催された。國學院大學のご協力を得て、常盤松ホールをメイン会場として、前半は、元 ICOM 委員長のスアイ・アクソイ氏による「日本の博物館の未来を拓く：国際的潮流から考える」と題したご講演会が、また、その講演を受けてワークショップが開催された。

アクソイ氏は来日のご予定だったが、ご都合により来日ができなくなり、急遽、リモートでのご講演となった。しかし、全国各地からオンライン 70 名を超える視聴者とメイン会場での視聴者 40 名の参加を得て実施することができた。また、国立科学博物館の支援により、同時通訳やハイブリッド開催が可能となったことを報告申し上げる。以下、紙面の許す範囲で、講師プロフィール・ご講演内容・質疑応答・ワークショップについて紹介する。詳細については、50 周年記念誌（あるいは学会誌特別企画）も予定されていることから、本ニュースでは実行委員会より概要の報告をさせていただく。

1. アクソイ氏のプロフィール

スアイ・アクソイ氏（Suay Aksoy）氏はトルコ在住の博物館学研究者であり、博物館学と文化遺産に関する講師、および独立コンサルタントとして活躍されている。2010～2014 に、CAMOC（都市博物館・コレクション国際委員会）の委員長を、2013～2016 年に ICOM 諮問会議議長を、2016～2020 年に ICOM 会長を務められた。2019 年に京都で開催された ICOM 総会に参加した多くの本学会員も、アクソイ氏にお会いしている。

2. 講演概要

このレクチャーでは、博物館が取り組んでいる、そして取り組もうとしている世界的な潮流の全体像を提示していきたい。その潮流は、もちろん日本を含む各国の博物館の歩む方向に影響を与えている。博物館が社会に果たす役割はますます

大きくなっており、脱植民地化、持続可能性、気候変動、デジタル化、研究と学習といったトピックにふれつつ博物館の未来を展望したい。

たしかにパンデミックは人々の生活に多大な影響を与えたが、それだけが急激な変化をもたらしたわけではない。シリアでの戦争が終わる前に、ウクライナでの戦争が始まった。難民の苦悩は継続的かつ圧倒的な現象であり、一方では都市不安の原因となり、他方では各国政府による新たな法整備をもたらした。ナショナリズムと権威主義の台頭が世界のさまざまな地域でも起きており、路上での暴力は世界中どこでも起きている。「Me Too」や「Black Lives Matter」の運動や事件は、身近な人々の輪を超えて波紋を広げ、博物館の理事会がスポンサーや博物館活動を再評価し、放棄せざるを得ない状態になったのも不思議ではない。気候変動と貧困は、かつてないほど私たちの生活に深く関わり、二酸化炭素排出量や、化石燃料に反対する主張は、博物館の運営にどう影響しているのだろう。

デジタル化を含む博物館における革新は、コレクションの利用法から、一般来館者へのアプローチ方法、財政管理まで多岐にわたる。そのなかで、包括性とは、博物館が門戸を開き、地域社会を受け入れるということではなく、地域社会が自分たちの生活の中に博物館を包含したり、受け入れたりすることを意味することとなった。つまり、博物館はいわゆる「建物に足を踏み入れる来館者」という枠を超え、市民にアピールし、人々の生活に関わっていく責務がある。収集、保存、研究、展示、そしてコミュニケーションという博物館の基本的な機能を損なうことなく、こうした目的地への道はどこにあるのだろうか？

博物館の基本的な機能を考えると、たとえば、保存活動における二酸化炭素排出量を減らすにはどうするか、倫理的な収蔵方法とは何か、社会的問題についての言説を含む展示にどう取り組むか



会場でのリモート講演の様子

など、いっそう多様な考慮が必要になる。博物館機能の相対的な比重の変化を考慮すべきなのである。一方、「研究なくして博物館なし」も当然である。博物館での研究、蓄積された知識こそが、デジタル時代における博物館の持続可能性の鍵なのである。専門家や豊富なコレクションを持つ博物館が、環境危機や複数の歴史といった分野で学校や生徒の成績を向上させることは、私たちの社会や経済の将来にとって極めて重要だ。

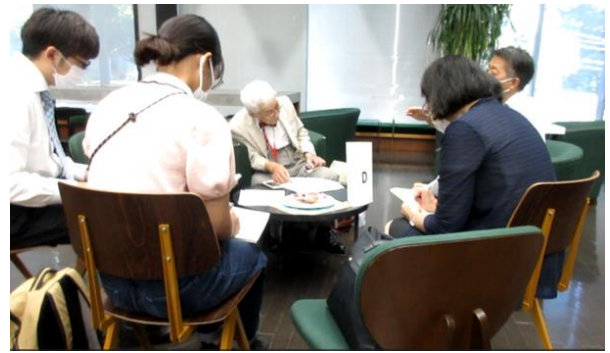
「モノ」自体は、よく保存されている場合は変化がないのかもしれないが、私たちがそれについて話す内容や方法は変化していく。このように博物館は、私たちが世界をどのように見て、私たちの周りで起こったこと、起こっていることをどのように解釈するかを形作る。多様性とは、今日、より多様な観客を惹きつけ、スタッフの多様性を構築し、植民地遺産に関する出所調査を行い、文化財の返還について議論し、収蔵計画に取り組むことに関心を寄せるなど、こうした「観点の変化」を意味する。そのことにより博物館が世界について語る物語、自然や文化について語る物語、誰の物語を語り、誰がその物語に耳を傾けるかということについても変化させていく。この多様性についての言説は、アーカイブの脱植民地化に向けた継続的な努力や、文書や物語にこれまで使われてきた「科学的」な専門用語、さらには物語の内容や語り手の選択に変化をもたらし、それはきっと私たちの心が脱植民地化されるまで続くだろう。

博物館は、歴史認識、一般への公開性、社会的信用を兼ね備えたユニークな存在である。ICOMが起草した「博物館とコレクションの保護と振興、その多様性と社会における役割に関する 2015 年 ユネスコ勧告」でも強調されているように、博物館の社会的役割が現代における博物館の使命として不可欠なのはこのためである。

COP26 会議の結論によると、気候変動との戦いは、あらゆるレベルでの社会的および経済的不平等との戦いも包含する。博物館コミュニティは社会、経済、自然環境と密接に絡みあっている中、国民から最も信頼され、政府やメディアよりも信頼される機関として、非常に貴重な役割を果たす。それは、持続可能な開発、社会共存、社会正義の文脈における私たちの義務なのである。

3. ワークショップ概要

講演後、「博物館の未来を拓くには」をテーマに、39 名の参加者が 5 グループに別れて自由に



ワークショップの様子

議論し、さらに深めたい点を明らかにし、アクソイ様からコメントをいただいた。その際の質問とコメントをグループ別に紹介する。

- (1) 硬いイメージの博物館学習だが、どのような工夫があるとよいか。

コメント：これは本当に世界どこでも同じ共通の問題である。例えば、展示物を見てグループでディスカッションすることもよいし、調べてわかったことから、物語を作ってもらうこともとてもクリエイティブな作業になる。

- (2) 社会的問題を扱うことに難しさを感じるが、その解決策へのヒント

コメント：その地域の具体的な問題を取りあげて、多様性・社会正義・平等といったようなメッセージが出せるような展示などはいかがか。

- (3) 若い人は、グーグルで調べて終わりという傾向があるが、どう考えたらよいだろう。

コメント：私たちができることは、博物館の資料をグーグルに提供することであろう。情報や知識の源に私たち博物館がある、ということだ。

- (4) SDGs など社会問題・経済問題について、博物館を含む社会教育機関はそれらをどのように扱うべきか。

コメント：博物館は、社会問題・経済問題に対応するうえで、他機関に比べて体制や設備がより整っているのではないかとと言える。その利点を活かすことを勧める。

- (5) 日本の民俗資料を扱う博物館で資料の処分や売却の問題をどう考えていくべきか。

コメント：共通して世界で起きている問題だ。保全や修復作業にも CO2 が排出されるうえ、売却や譲渡に至ることもある。それらが倫理的に行われているかどうかが重要だ。ICOM でもその手続きについてのルールを公表する用意をしている。

(行事担当委員 並木美砂子)

全日本博物館学会後援事業
東京大学大気海洋研究所共同利用研究集会
第 10 回 水族館シンポジウム
「水族館とは？日本の水族館を考える」
一般参加のご案内

コンビナー

猿渡敏郎（東京大学大気海洋研究所・成蹊学園サステナビリティ教育研究センター）
西 源二郎（元東海大学海洋科学博物館）
植田育男（神奈川大学）
栗田正徳（名古屋港水族館）
杉野 隆（東京都葛西臨海水族園）

開催日時（時刻は予定）

令和 5 年 12 月 4 日（月）10：00～18：15
令和 5 年 12 月 5 日（火）9：00～16：30

会場

東京大学 大気海洋研究所 講堂
（ポスター掲示：エントランスホール）
千葉県柏市柏の葉 5-1-5
アクセス方法はこちらをご覧ください。

<http://www.aori.u->

tokyo.ac.jp/access/index.html

参加方法

東京大学大気海洋研究所での対面形式または Zoom を使用した Web 形式での参加となります。ポスター発表は、対面形式のみとなります。

募集人数

対面形式：50 名

Web 形式：250 名

☆対面形式での参加希望者多数の場合は、抽選で Web 形式での参加をお願いすることがございます。予めご了承ください。抽選結果は、11 月中旬にメールにてご連絡いたします。

参加申し込み方法

こちらのサイトからお申し込みください。
<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSfoDztU89IwZpI11zndN7x1u8fcsaZODuFsrFBOgqKBzh3Q/viewform>

参加申し込み開始

令和 5 年 10 月 16 日（月）10:00

参加申し込み締め切り

対面方式での参加：令和 5 年 11 月 15 日（水）17:00 まで
Web 形式での参加：令和 5 年 11 月 30 日（木）17:00 まで

Web 形式での参加に関する情報

Zoom に関する情報は、参加申し込み締め切り後、12 月初旬にメールにてご連絡いたします。

注意事項

- ・新型コロナウイルス感染症の感染再拡大も否定しきれない状況です。研究集会の開催方法については、11 月下旬の感染状況から、Web 開催のみへと変更する可能性もございます。予めご了承ください。
- ・会場および Web 上での録画・録音・撮影を禁止します。ただし、個々の発表に関しては、演者の許可がある場合は認めます。
- ・活発な意見交換、情報交換を歓迎いたします。しかし、個人や団体を攻撃したり誹謗中傷するような発言やチャットへの書き込みはご遠慮ください。そのような行為を行った方には会場から退出（対面、Web ともに）していただく場合があります。
- ・Web で参加される方は、11 月下旬ごろ、Zoom の最新バージョンをダウンロードしておいてください。

お問い合わせ先

猿渡敏郎（東京大学大気海洋研究所）、
tsaruwat アット aori.u-tokyo.ac.jp （アットを@に変換）

ご応募された方の 個人情報 は東京大学の規定に従い適切に管理いたします。当シンポジウム以外の目的には使用いたしません。また、第三者に開示・提供することはありません。

シンポジウム開催趣旨

四方を海に囲まれた日本国内には、70 以上の水族館が存在し、海なし県であっても世界各地の水生生物の生きた姿を身近に見ることができる。国内水族館の年間総来館者数は三千万人を超え、実に日本人の四人に一人が毎年水族館へ行っている計算になる。水族館の有する海洋と水生生物に関する情報発信能力、普及啓発効果は計り知れない。日本の水族館の飼育展示に関連した技術は世界最高であり、希少種の域外保全、増養殖業への技術転嫁をはじめ、学術面でも、水生生物の生きた姿を手軽に観察できる強みを生かした研究で貢献している。博士号を取得した飼育技術者も大勢存在する。展示生物の採集活動に併せて地域の水辺に生息する生物に関する情報も収集している。このように、水族館は単に水生生物を展示するレ

クリエーション施設にとどまらず、地域に根差した水生生物研究の拠点としての役割を果たしている。

水族館関係者と、大学、博物館、関連分野の研究機関の研究者が集い、忌憚のない意見交換を行う場を提供すべく、2005年から隔年開催でこれまでに9回、毎回テーマを変えて水族館シンポジウムを開催してきた。一連の講演を基に、二冊の単行本、『水族館の仕事』と『研究する水族館』を世に出すことが出来た。水族館関係者の間では、広く認識された、評価の高いシンポジウムに育っている。

日本の水族館をめぐる環境は、過去20年ほどの間に、指定管理者制度の導入、いわゆるイルカ問題、展示生物の輸入規制、ABS、動物福祉問題など、大きく様変わりしてきている。加えて、2020年からの新型コロナウイルスの蔓延によって休館する水族館が相次ぎ、中には閉館に追い込まれる施設も現れた。このような状況の中で「水族館は何ができるのか?」「水族館の社会的責務とはなにか?」について、それぞれの水族館で真摯な検討がなされている。

そこで本シンポジウムでは、全国の水族館関係者はじめ水族館に関心を持つ幅広い分野の研究者の参加を得て、最新の研究成果のほかに、現在直面している問題についての取組状況などを報告してもらう。そして、水族館の抱える課題を整理し、今後の水族館の進むべき道について議論し、日本の水族館の将来像を描くことを目的とする。

プログラム

口頭発表

12月4日(月曜日)

I. オープニングセッション

10:00～10:30

1. 水族館シンポジウムの歩み。いままでとこれから

猿渡敏郎(東京大学大気海洋研究所・成蹊学園サステナビリティ教育研究センター)

10:30～11:35

2. 水族館はどう発展してきたか その機能の変遷と課題

西 源二郎(元 東海大学海洋科学博物館)

11:35～12:55

ポスターセッション(奇数番コアタイム)・
昼休み

II. 水族館の機能の現状と課題

12:55～13:20

1. 「魚病」治療から予防へ 大型板鰐類の個体管理、自作ワクチンを用いた予防、行動評価から判定する適正飼育環境

柳澤牧央(大分マリンパレス水族館
うみたまご)

13:20～13:45

2. 魚類繁殖の実情～保全? 保存? 展示? 何のための繁殖か?～

池谷幸樹(世界淡水魚園水族館 アクア・トトぎふ)

13:45～14:10

3. 調査を起点とした海きららの取り組み

川久保晶博(させぼパール・シー株式会社
海きらら)

14:10～14:35

4. 水族館での環境教育の進め方 ～課題と展望～

大和 淳(新潟市水族館マリニピア日本海)

14:35～14:45 休憩

III. 水族館と社会(1)

14:45～15:10

1. 博物館法における水族館の在り方

高田浩二(海と博物館研究所)

15:10～15:35

2. 「水族館大学」が考える水族館に期待すること

○亀崎直樹(岡山理科大学)・幸島司朗
(京都大学)

15:35～16:00

3. 小規模水族館の新機軸 ～地区の活動に特化した草の根水族館の活躍とは～

植田育男(神奈川大学)

16:00～16:25

4. 動物園から見た水族館

佐渡友陽一(帝京科学大学)

16:25～16:35 休憩

16:35～17:00

5. 学校教育における水族館を活用した教育連携のこれまでとこれから

○大鹿聖公(愛知教育大学)・大谷恵里
(名古屋市立伝馬小学校)・古市博之
(犬山市立楽田小学校)

17:00～17:25

6. マスメディアから見た水族館

森下絵理香(NHK 動物番組担当者)

17:25～17:50

7. さかなクンから見た水族館
さかなクン（東京海洋大学）（リモート講演）

17:50～18:15

8. 経営学から考える水族館の特徴と論点
原澤恵太（帝京科学大学）

18:30～20:30

懇親会（大気海洋研究所エントランスホール）

12月5日（火曜日）

Ⅲ. 水族館と社会（2）

9:00～9:25

9. 経営者から見た水族館事業開発 ～近年開館の水族館（四国水族館、átoa、スマートアクアリウム静岡）の狙い～
小林弘嗣（株式会社アクアメント事業本部）

9:25～9:50

10. 英米水族館の寄附金獲得戦略
瀧端真理子（追手門学院大学）

トピックス：研究最前線

9:50～10:10

1. アカウミガメの繁殖・育成個体を用いた回遊経路調査 ～国際的な研究グループの中で日本の水族館が果たした役割
○栗田正徳（名古屋港水族館）・George H. Balazs（Golden Honu Services of Oceania）・Jeffrey J. Polovina（ハワイ大学）・Dana K. Briscoe（スタンフォード大学）・斉藤知己（高知大学）・Jeffrey A. Seminoff（NOAA）・Larry B. Crowder（スタンフォード大学）

10:10～10:30

2. ジンベエザメの国際野外調査
○松本瑠偉・村雲清美（沖縄美ら海水族館）

10:30～10:50

3. 北海道知床羅臼町で確認された17種の未記載種や日本初記録種の展示と活用
○松崎浩二（ふくしま海洋科学館）

10:50～11:10

4. 水産研究機関との連携によるアカムツ研究への取り組み
○新田 誠（新潟市水族館）・八木佑太（水産機構資源研）・飯田直樹・福西 悠（富山水研）

11:10～12:30

ポスターセッション（偶数番コアタイム）・
昼休み

Ⅳ. 水族館の問題点

12:30～12:55

1. 魚類、無脊椎動物飼育展示における動物福祉
岩橋佑佳（元シーライフ名古屋）

12:55～13:20

2. 水族館におけるイルカ類の管理（飼育展示と個体群動態）
勝俣 浩（鴨川シーワールド）

13:20～13:45

3. 日本鯨類研究協議会から一般社団法人日本水族館協会設立へ ～既存の協会との違いと協調に関する試論～
栗田正徳（名古屋港水族館）

13:45～13:55 休憩

Ⅴ. 世界の水族館と日本の水族館

13:55～14:20

1. WAZA（世界動物園水族館協会）における水族館
岩田雅光（ふくしま海洋科学館）

14:20～14:45

2. IAC 世界水族館会議の現状と将来への展望
大山卓司（新江ノ島水族館）

14:45～15:10

3. アジア（中国）の水族館の現状：日本の水族館との違い
デイビット ライ（元チャイムロング・オーシャン・キングダム、中国）

15:10～15:35

4. 私的体験の範囲で考える日本とアメリカの水族館の違い-社会的役割の観点から
本田公夫（The Maritime Aquarium at Norwalk, USA）（リモート講演）

15:35～16:00

5. ヨーロッパの水族館—その過去と未来
溝井裕一（関西大学）

Ⅵ. 総合討論：

16:00～16:30

これからの水族館、どこへ向かっていくのか？

ポスター発表

発表コアタイム

奇数番号： 2023 年 12 月 4 日 11:35~12:55

偶数番号： 2023 年 12 月 5 日 11:10~12:30

P1. 京都大学白浜水族館の役割

中野智之・山守瑠奈・河村真理子（京大瀬戸臨海）・山内洋紀・原田桂太・山本恒紀・加藤哲哉（京大白浜水族館）・朝倉 彰・○下村通誉（京大瀬戸臨海）

P2. 明治・大正時代の水族館教育に関する考察 根来 央（金魚坊主）

P3. 学生が考える！「学生水族館」の役割 新藤 想（北里大学アクアリウムラボ）

P4. 水族館における「観察の視点」の体系化 青木和輝（東京シーライフボランティアーズ）

P5. 島の水族館

○内田博陽・濱津芳弥（周防大島町なぎさ水族館）

P6. 朝日小学生新聞連載 「ここまでわかった 深海生物のなぞ」の紹介 猿渡敏郎（東大大海研・成蹊 ESD セ）

P7. 「アマモ場」展示水槽改修に伴うアマモの再 導入とその後の飼育経過について

○三森亮介・宮崎寧子・古橋保志・遠藤周太（東京都葛西臨海水族園）

P8. 人工海水水族館の新規水槽立ち上げ期にお ける微生物メタゲノム解析

○森 香穂（東大大海研）・西村陽介（JAMSTEC 生命理工学センター）・塚本雄也（理研バイオリソースセンター）・菅井洋太（東大大海研）・伊知地 稔（都立大）・岩橋佑佳（シーライフ名古屋）・吉澤 晋（東大大海研）

P9. 人工海水を用いたヤングミドリイシ有性生 殖の試み

○萬 倫一・野口彩伽・坂田弥耶（マクセル アクアパーク品川）・砂川政彦・小林鉄郎（八重山漁協サンゴ種苗生産部会）・木村祐子（AI ネット株式会社）

P10. 水族館に搬入されたヤギ類（八放サンゴ 綱）

園山貴之（新江ノ島水族館）

P11. かがしま水族館の屋外展示エリア「イルカ 水路」の魚類相 ～身近な海の生物相を把握 し、地域に還元する～

○中村潤平・柏木伸幸・西田和記・堀江 諒（かがしま水族館）

P12. コクテンサンゴトラザメ（*Atelomycterus fasciatus*）の血液中における細菌の検出と解析

○伊東隆臣・喜屋武樹（海遊館）・松野克輝（大阪府立大学）・古家 優・笹井和美（大阪公立大学）

P13. シロヒレタビラの人工繁殖における簡易飼 育法の比較検討

○今北大介・川瀬成吾（滋賀県立琵琶湖博物館）

P14. 人工飼育下におけるビワマス初期段階の餌 料比較

○寺嶋伊武樹・米田一紀（滋賀県立琵琶湖博物館）

P15. 東北沖を中心に確認されたサケビクニン複 合種群における交雑

○亀井遥香・小島茂明・伊藤 萌（東大大海研）・成松庸二（水産機構）・森 俊彰（ふくしま海洋科学館）

P16. イソギンポ科 カチュディート

（*Hypsoblennius sordidus*）の水槽内繁殖と育成について

○関 啓汰・小味亮介・太田智優・中村浩司（東京都葛西臨海水族園）

P17. 熱回廊仮説：北太平洋のアカウミガメに対 する海洋温暖化の影響を理解するための海洋学 的実験アプローチ

○栗田正徳（名古屋港水族館）・Dana K. Briscoe（スタンフォード大学）・Bianca S. Santos（スタンフォード大学）・George H. Balazs（Golden Honu Services of Oceania）・Jeffrey J. Polovina（ハワイ大学）・Jeffrey A. Seminoff（NOAA）・Alberto Abreu-Grobois（メキシコ国立自治大学）・森 昌範（名古屋港水族館）・Denise M. Parker（Golden Honu Services of Oceania）・Marc R. Rice（Hawaii Preparatory Academy）・斉藤知己（高知大学）・Calandra N. Turner Tomaszewicz（NOAA）・山口永晏（高知大学）・Larry B. Crowder（スタンフォード大学）

P18. 科学的探究力の AI を用いた評価方法につ いて

○奥林璃香・佐々木 剛（東京海洋大学）

P19. プログラム評価指標としての関係価値の活 用可能性について

○澤田昂汰・佐々木 剛（東京海洋大学）

P20. 危険回避時における船員の思考プロセスに 関する研究

○鍵谷祥麦・佐々木 剛・林 敏史（東京海洋大学）

《展覧会への誘い》
新潟県立歴史博物館秋季テーマ展示
守れ！文化財
「障害」をめぐるモノとヒトに光を灯す

1. 守れ！文化財～モノとヒトに光を灯す～

現在、文化庁の「Innovate MUSEUM 事業」の補助金を得て「守れ！文化財～モノとヒトに光を灯す～」事業を実施している。平成 31 年度から、同じく文化庁の「地域と共働した博物館創造活動支援事業」の補助金を得て開始してからの継続で、5 年目になる。

「守れ！文化財～モノとヒトに光を灯す～」事業実行委員会が行うもので、新潟県立歴史博物館が中核館となり、上越市立歴史博物館、京都府立豊学校、川村義肢株式会社、九州保健福祉大学が実行委員となって推進している。

その一定のまとめとして開催するのが、この 10 月 28 日からの『守れ！文化財～「障害」をめぐるモノとヒトに光を灯す～』である。

2. 「守れ！文化財」展

「守れ！文化財」のタイトルでの展示は、これが初めてではない。平成 29 年度の 1～3 月にかけて「守れ！文化財—博物館のチカラ、市民のチカラ—」を開催したことは、当学会ニュースでも紹介したし、多くの会員の方にご覧いただいたのは有難かった。

その第 2 弾という見方もできるだろう。そもそもこの事業のきっかけは、京都府立豊学校所蔵の京都盲啞院関係資料が重要文化財に指定されたものの、その保管環境に不安を感じた酒井弘校長先生（当時）の声を聞き及ぶに至り、博物館だけで守るのではない、博物館外にある様々なモノを守れなくて、何が博物館、何が学芸員なのかと考え、始めたのである。根底はやはり「守れ！文化財」だった。そこで事業名にもしたし、展覧会名にもなったというわけだ。

3. 「障害」をめぐる、とは

ただ闇雲にモノを集め、「守れ！」というのではなく、博物館や博物館外、さまざまな場でモノが守られなければならないことを伝えるのには、一定のテーマが必要である。

そんな中、京都府立豊学校の資料と出会った。

そして、新潟には日本で 3 番目の盲学校、高田盲学校がある。ここに「障害」というキーワードが浮上。コロナ禍など予想もせず、パラリンピックの開催も控えた時期で、そのパラリンピックも取り上げたいとの思いも募った。さらに、義肢装具類を開発・製作している会社の方とのつながりもできた。「障害」というキーワードを抜きにした事業でなくなったのは当然だった。展覧会名に「障害」を加えたのも自然の流れだったかもしれない。さまざまなモノが本当にさまざまな環境に置かれている、それをどう守っていくべきなのかを考えてほしいと思ったし、そのテーマがたまたま「障害」だったのかもしれない。

4. 挑発する展示？

—自分ごととして捉えるために

バリアフルレストランという試みをご存知の方は多いのではないと思う。車いす利用者が経営する、天井が極度に低いレストランである。車いすの方には快適であるが、いわゆる健常者には、立ち上がることはできず、移動も容易ではない。つまり、敢えて健常者にとってのバリアを作ることによってバリアフリーな社会とは何かを考えさせるきっかけになるのだ。

そこで思いつくのが、バリアフル展示である。展覧会などでアンケートをとると、展示が低くて腰が痛くなったという意見を見ることがある。車いすの視線も考慮し低くしていることを伝えても意外なほど伝わらない事実がある。ならば敢えて挑発するという思い切った方策に出ることもあっていいのではないかと考えた。

「障害」をキーワードとするのだから、その「障害」にも理解を示す展示でなければならない。だからこそその「障害」と向き合うためのバリアフル展示を考えている。極度に挑発するようなことはできないかもしれないが、敢えてのやり方に注目してもらえればと思う。

以上、是非ご観覧いただきたい展示を紹介させていただいた。もちろんそれだけではない。せっかくの機会に長岡で新潟の美味しいお酒、そして美味しい食事も楽しんでいただきたいと思います。展示を見るだけが博物館を知ることではない。その地方の飲食文化を知ること、博物館を知ることだと思っている。

（山本哲也 新潟県立歴史博物館）



※開催要項

会期：令和5年10月28日(土)～12月17日(日)

休館日：月曜日

時間：9：30～17：00

観覧料：無料（常設展示は観覧料が必要です）

イベント：

○記念講演会「盲教育資料はどう活かされてきたか、そして、今後は？」

京都盲啞院資料や大阪府立大阪北視覚支援学校等の資料整理に関わってきた経験や、日本盲教育史研究会での研究成果などにもふれ、盲学校資料を文化財としてどのように保存・活用していくべきかお話しいただきます。

日時：11月11日(土) 13：30～15：00

講師：岸 博実 氏

(日本盲教育史研究会事務局長)

会場：新潟県立歴史博物館講堂

聴講無料、要事前申込

TEL(0258)47-6130 FAX(0258)47-6136

E-mail:koryu@nbz.or.jp

○「ほじょ犬のひろば in ながおか」

盲導犬・聴導犬・介助犬について、皆さんはどこまで知っていますか？これらの身体障害者補助犬が集まり、皆さんと楽しく学ぶ時間を提供します。(補助犬のデモンストレーションなどを実施します)

期日：11月12日(日)

新潟県立歴史博物館秋季テーマ展示
守れ！文化財
「障害」をめぐるモノとヒトに光を灯す

全国の「障害」に関わる歴史資料について、「モノ」と「ヒト」に焦点をあてて展示します。展示では「障害者」の歴史ではなく、「障害」とどのように向き合ってきたのかというテーマで歴史をも紐解きます。

さまざまな場所で選り抜かれた「障害」にまつわる資料たちは、これまで博物館のなかでは扱われることがなかったけれども、重要な歴史遺産であることがわかるでしょう。そして「障害」をめぐる資料群を「守る」ために、その「障害」の当事者や当事者団体のみならず、より多くの方にご関心を持って見ていただきたいと思います。

記念講演会
「盲教育資料はどう活かされてきたか、そして、今後は？」
日時／令和5年11月11日(土) 13:30～15:00
講師／岸 博実 氏
(日本盲教育史研究会事務局長)
内容／京都盲啞院資料や大阪府立大阪北視覚支援学校等の資料整理に関わってきた経験や、日本盲教育史研究会での研究成果などにもふれ、盲学校資料を文化財としてどのように保存・活用していくべきかお話しいただきます。※手話通訳あり
会場／新潟県立歴史博物館 講堂
定員／150名(要申し込み)
会費／新潟県立歴史博物館 観覧券 150円

体験プログラム
点字メッセージカードを作ろう
日時／10月29日(日)、11月5日(日)、11月12日(日)、11月19日(日)
会場／新潟県立歴史博物館常設展示室内
体験コーナー
期日／13:30～15:30(15:00受付終了)
※聴導犬などの参加には事前申込が必要となります
※申し込み不要

関連イベント
「ほじょ犬のひろば in ながおか」
日時／令和5年11月12日(日) 10:00～16:00
会場／新潟県立歴史博物館 講堂・定立広場ほか
内容／盲導犬・聴導犬・介助犬について、皆さんはどこまで知っていますか？これらの身体障害者補助犬が集まり、皆さんと楽しく学ぶ時間を提供します。※手話通訳あり
①介助犬・盲導犬のデモンストレーション (11:00～12:00、申し込み不要)
会費／新潟県立歴史博物館 観覧券 150円ほか
協力／社会福祉法人日本介助犬協会・公益財団法人日本盲導犬協会
②講演／「聴導犬と共に生きる」 (14:00～15:30、要申し込み)
講師／安藤美紀さん・安藤一成さん
定員／150名
会場／新潟県立歴史博物館 講堂

問合せ・申込先／新潟県立歴史博物館 交流普及部
〒940-2035 新潟県長岡市長岡1丁目4番地2247-2 TEL 0258-47-6130 FAX 0258-47-6136 E-mail:koryu@nbz.or.jp
「守れ！文化財」モノとヒトに光を灯す～事業実行委員会構成機関：新潟県立歴史博物館(中核機関)・上越市立歴史博物館・京都市立歴史資料館・川村義典式会社・九州産業福祉大学

・10：00～12：00、13：00～16：00

関連グッズ展示

・11：00～12：00

補助犬のデモンストレーション

参加無料、当日受付

・14：00～15：30

講演会「聴導犬と共に生きる」

講師：安藤美紀さん・安藤一成さん

生まれた時から音のない世界で生きていた安藤美紀さん。言葉を獲得するまでの道のり、子供時代の飼育犬とのエピソード、聴導犬との出会い、子育ての苦労と喜びなどを面白おかしく語っていただきます。安藤一成さんのミニコンサートもお楽しみに。

会場：新潟県立歴史博物館講堂

聴講無料、要事前申込

(上記記念講演会と同じ)

○体験プログラム

「点字メッセージカードを作ろう」

実際に点字器を使って、自分の名前などを点字で打ってみる体験です。

期日：10月29日(日)・11月5日(日)・12日(日)・19日(日)

時間：13：30～15：30(受付は15:00まで)

場所：常設展示室内体験コーナー

当日受付、参加無料

(ただし常設展観覧券が必要です)

会告

選挙管理委員の募集について

2024年2月の投票をめぐり、2024・2025・2026年度の本会会長及び委員の選挙を実施します。ついでには個人の正会員中から、この選挙を担当する選挙管理委員を5名、募集します。選挙管理委員をお引き受けいただける会員は、HPに掲載されている選挙管理委員応募届にご記入の上、電子メール、ファックスにて下記学会事務局あてにご連絡ください。電子メールによる届け出の場合は、選挙管理委員に応募する旨と氏名・住所・電話番号・メールアドレスをご記入ください。その際、件名を「選挙管理委員応募」としてください。応募締切は、**2023年11月30日（木）17:00 事務局必着**とします。

応募者が6名以上あった場合は、委員会で選考させていただきます。応募者が5名に満たなかった場合は、応募者以外は委員会で推薦した会員に就任をお願いする予定です。

- ・ **応募届出先** 全日本博物館学会事務局
〒150-8440 東京都渋谷区東 40-10-28 國學院大學博物館学研究室内
FAX : 03-5466-0268
E-mail : jimmu@museology.jp
任期（予定） 2023年12月（委嘱時）～
2024年6月（総会時）

・被選挙権の制限

選挙管理委員には、被選挙権（会長及び委員の候補者となる権利）がありませんので、ご注意ください。

- ・ **会議** 選挙事務の進行上、委員会は任期中に最少で4回開催される見込みです。開催地は別途ご連絡致します。

第1回（2023年12月頃） 顔合わせ、委員長
の互選、選挙日程の決定、選挙人・被選挙人名
簿の作成、立候補・推薦の募集

第2回（2024年1月下旬頃）立候補・推薦の受
付、被推薦者の意思確認

第3回（2024年2月初旬頃）選挙公報の作成、投
票用紙の配布

第4回（2024年3月中旬頃）投票の受付、開票、
当選者の確定

- ・ **報酬** 各選挙管理委員には、任期全体に対して
10,000円の報酬をお支払いします。

※本件は会長及び委員の候補者の募集ではありません（候補者の募集は2024年1月頃に行う
予定です）。

会員情報

入会者（正会員8名）

芹澤凜香 大山裕
中野多恵 小関瑠奈
西村修 片木研司
嶋和彦 清水美幸

退会者（正会員6名）

高橋幸次 渡邊尚樹
廣瀬智子 胡桃沢朱美
笠井優 徳田明仁

※上記入退会者に関しては10月時点

【会員数】 [2023年10月現在]

一般会員（学生会員含む） 487名
賛助会員 10団体

年会費納入について

2023年度分年会費のご納入が未済の方は、下記のいずれかの口座まで、ご入金ください。正会員の年会費は6,000円です。お早めにお振込みいただけますと幸いです。

- ・ 郵便振替 00170-4-26144
加入者名：全日本博物館学会
 - ・ 三菱UFJ銀行 池袋支店
普通預金 1304291
口座名義：全日本博物館学会
- ※会費納入等に関するお問い合わせは、事務局までメールでご連絡下さい。

*2023年2月4日研究会の開催報告は、次号に掲載予定です。